

氏名	佐々木 誉斗
ヨミガナ	ササキ タカト
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第512号
学位授与年月日	平成28年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 装飾と造形の相互関連性 〈作品〉 繋連

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	島田 文雄
（論文第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	片山 まび
（作品第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	豊福 誠

（論文内容の要旨）

本論文では、工芸および陶芸分野における「装飾」と「造形」の特徴と可能性を再考し、両者に内在する歴史的な文脈や、文化的影響、そして作家個人々の意思や概念などの様々な側面に目を向け、空間における「装飾と造形の相互関連性」の重要性を提示する。

私が使用する「装飾」と「造形」の二語には、一般的な意味よりも、より限定された独自の定義が存在している。人間の根源的な欲求の一つである「装飾」とは、「自己を認識する行動」であり、「世界と自己との関係性を構築する行為」、つまりアイデンティフィケーションとしての側面から発生している、と定義する。そして「造形」とは、「概念や意識などの無形物を可視化する」行為そのものと定義する。両者の関連性を深く考察した結果、および自らの創作活動の体験から、私はこれらの行為のなかに、人間の意識や概念が秘められている点に特に注目している。同時に、それらは「複合的な感覚」によって発現する性質のものである。ここで言う「複合的な感覚」とは、素材が持つ固有の特性と、作家各々が抱く心情や創造性、感性や視点などを自覚的に結び付け、表現の理路を獲得していく際に形成される、唯一無二の感覚なのである。美術・工芸領域の「装飾」と「造形」を考察する場合、表層的な要素にのみ注目するのではなく、その背後に存在する「人間」の存在を見つめ、「身体」と「精神」の感覚が結びつく関係性を意識しなければ、その本質を見失ってしまうのである。

ゆえに、現代の作家である自身が、空間に展開する装飾と造形の相互関連性を研究する真意とは、工芸作品の生成原理と自身の感覚とをより密接に関連付け、共鳴させながら、独自の「表現言語」を導き出す試みなのである。

イギリスの大学、大学院に留学していた当時、私はそうした認識に基づいた感覚の形成現象を「マテリアル・アウェアネス」(Material Awareness)と定義し、以来、自身の作品制作における主要なテーマとして位置付けてきた。この概念は、美術・工芸の作業工程において欠かせない要素であり、特に、工芸表現における根本原理を成すものの一つである。

作家は、表現媒体である素材を扱うプロセスにおいて、両者の関わりをはっきりと認識し、さらに知覚や触覚といった潜在的な感覚と呼応させることで、独自の「複合的な感覚」、つまりマテリアル・アウェアネスを形成している。私の博士後期課程における作品制作および研究では、それらを自覚的に捉え直し、実践的な装飾と造形理論として展開、発展し得る可能性について論究するものである。装飾を単なる表層表現と限定せず、立体構造を組織する一因子として扱うことで、美術・工芸における可能性を大いに広げ、発展し得ると確信しているのである。

第一章では、陶芸分野における装飾の精神部分に焦点を当て、意識や思想といった心情概念が、いかに造形へと発展し、表現されるのかを論じる。人間が装飾と造形を表現として獲得する過程には、個人の「認識

力」や「アイデンティティ」の形成が、非常に重要な役割を担っている。装飾と造形は、共に「視覚言語」および「表現言語」としての性質を有しており、自身や世界をいかに認識するかに端を発する。つまり抽象概念を視覚化する際のアプローチである。特に、陶芸領域においては、粘土という表現媒体を通して作者自身のマテリアル・アウェアネスが投影され、相互に影響し合う関係性が成立しているのである。

第二章では、総合的な造形における組織として「模様」を認識していた陶芸家、富本憲吉の観点に着目し、装飾が立体を構成する要素の一つとして、いかに存在し、機能しているかという点を考察する。装飾は、表面に見えている部分のみで完結しているものではなく、立体構造を特徴付け、「装飾から造形へ」そして「造形から装飾へ」と、相互に発展・影響し合う美術・工芸理論として発展し得るものである。装飾が造形に及ぼす影響を多角的に分析し、立体要素としての性質を論じる。

第三章では、博士後期課程における本研究が、いかなる背景と視点によって考究されているのかを明らかにするため、自身の根本思想と観点に大きな影響を及ぼした自身のイギリス留学経験やその経緯、そして芸術家としての自意識について論述しながら、過去の作品制作研究および活動内容の「再文脈化」を試みる。イギリスで「セラミックス」を学んだ私は、日本に帰国後、東京藝術大学の「陶芸」の世界で、作品制作と研究を継続してきた。その際、私はこれまでの表現手法はもとより、自身のアイデンティティまでも再考する必要性を実感してきた。それは、一般の日本人学生とも、海外留学生とも異なる経歴を持つ自分が、これまでに培ってきた思想や価値観を、日本の「陶芸」という文脈上でいかに再定義するのか。そして、精神性や象徴性、アイデンティティといった要素を、日本の美術・工芸の世界や表現のなかに、いかにして関連付けるのかを探求する道のりでもあった。研究主題である「装飾と造形の相互関連性」を論究するにあたり、そうした一連の「再文脈化」は、自作品と研究における核心部分を考察するうえでも、常に必要不可欠な要素として位置付けられてきたのである。

第四章では、「繋がり・連なる形態」の表現に、三次元、つまり空間に展開する装飾と造形の相互関連性を体現する可能性を見出すに至った過程を叙述する。博士審査展提出作品「繋連」が完成するまでの試作品や、ドローイングなどに代表されるヴィジュアル・リサーチ、そして使用した材料や技法などについても言及しつつ、その背景となるコンセプトや制作意図を明らかにする。

(論文審査結果の要旨)

佐々木誉斗氏は、学部から修士にかけてイギリスで「セラミックス」を学んだ作家である。彼の地の教育は自らのアイデアを常に言語化することが求められるが、氏の論文はその鍛錬の賜物ともいえ、文章力の高さと相まって、きわめて論理的に自作を論じた質の高い論文となっている。

論文は四章からなり、三章まではコンセプト、四章は提出作品について論じられる。第一章では、氏の創作が「作る」というよりも、自身の世界に対する「認知と行為」であることが論じられ、読者にその制作態度を丹念に伝えている。第二章では、提出作品のコンセプトの根幹をなす、立体と平面が融合した複合的な装飾の可能性を提示する。さらに富本憲吉など海外と日本の複合的な視点を持ちえた、自身の経験とも重なる日本人作家について取り上げつつ、第三章において日本の「陶芸」とイギリスの「セラミックス」との融合というアイデアを展開するに至っており、論の展開も明快で破綻がない。

全体として、日本のなかでの再文脈化に拘泥した結果、イギリス、もしくは西欧の「セラミックス」のなかでの自作の位置づけについては、今少し論じる必要性も残されている。しかし日本の陶芸界においては、強固にコンセプトを打ち立て、それに作品を添わせていくタイプの作家はきわめて希であり、本論文は新たな陶芸作家の在り方を示したという点で高く評価され、博士学位授与に相当するものと判断したい。

(作品審査結果の要旨)

佐々木誉斗君の博士修了作品「繋連」は、博士論文「装飾と造形の相互関連性」におけるマテリアル・アウェアネスの定義を立体作品に、表現言語化した試みの一つである。

作者が論文中3章以降で述べる東京芸術大学で試みて来た一連の作品は、それぞれが作者の理論展開を実

証するファクターに満たされており、制作行為そのものの重要性を物語るものである。「形象」、「表象」、「Matrix」、「繋連」、それぞれのシリーズ作品における制作行程の成形には、作者の一貫したこだわりとも言うべき、手仕事による構築によって、形作られている。「形象」シリーズでは、磁器土の塊を彫り、削りだす行程の繰り返しによって形成し、その作業の中での「気づき」を具現化する試みを実践している。「表象」シリーズでは、塊から彫りだされた粘土に着目して、粘土を叩き付ける行為によって得られる、不定形の薄く叩き伸ばされた粘土片を積み上げた集合体としての立体作品に展開している。「Matrix」シリーズでは、粘土の塊に金属製パイプを差して得られた粒状の粘土を粘土板上に粒同士を結合し構築した凹凸のある板状の作品とした。さらに、日本の伝統的な装飾技法である「染付」を施す事により、「造形」と「装飾」の関連を実証する為の重要な作品となり、博士提出作品「繋連」に展開した。

提出作品「繋連」は、磁器土を素材に大きさの違う数種の石膏型による張り込み成形の技法を用いた、四面体を成形し、素焼き焼成後に点描による染付の装飾を施した三角錐の集合体作品である。成形に際し、作者のこれまでの一貫した制作姿勢により、手仕事による削り仕上げを一つ一つに施し、同一の形態に微妙な違いを表出している。又、呉須を使った点描にも筆書きによる染付けの装飾効果が、作者の意思を反映している。集合体の作品としての円形の台と3枚の鏡を組み合わせた展示装置は、鑑賞者の視覚に「つなぎ連なること」を感じさせる効果を発揮しており、論考と合致した秀作である。

(総合審査結果の要旨)

作者の創作に対する基本は、アプローチが重要で、自分の表現したいアイデアとその思考過程が創作の中心であると定義して創作活動を行っている。作品とはその結果行為の痕として出来上がったものである。終章で「私の作品制作と研究は、プロジェクトとして進行する傾向が強く、自分の時々に見える興味や関心を、自分の思考に絶えず関連付けながら発展して来た。」と述べているように、イギリスの美術大学の藝術に対する創作教育の影響を強く受けている。東京芸術大学の博士課程の学生として自己探求するプロジェクト、日本人としてのアイデンティティーを追求し、その融合作品が今回の繋連の作品となって現れている。研究論文はまず装飾と造形の定義を筆者なりに定義して論考を進めている。装飾とは自己を認識する行動、世界と自己との関係性を構築する行為、「つまり自己認識としての側面から発生している」と定義し、「造形」とは、「概念や意識などの無形物を可視化する行為そのもの」と定義し、論考を進めている。よって、染付けとは点描する行為そのものが染付けであって、具体的に物体を描くという描画ではなく、その描く行為が重要な点であると認識し制作した。従って染付けの表現はそれなりに色分けされ、濃淡もつけられているが、その細部が重要ではなく全体の装飾の行為が重要との主張に立って「繋連」という作品に表現されている。筆者はイギリスの大学院に留学していた当時、「装飾」と「造形」の相互関連性を研究、両者を共鳴させながら、独自の「表現言語」を導きだす試みのなかの認識から「マテリアル・アウェアネス」(物質の認識、気付き)と定義し、以来、自己の作品制作における主要なテーマと位置付けて制作して来た。この事は「工芸表現における根本原理を成す」と述べている。「複合的な感覚」マテリアル・アウェアネスを自覚的に捉え直し、実践的な装飾と造形を理論として展開、発展しえる可能性について論考する。論文は十分に練られ、推敲されており、秀でたレベルの研究論文であると評価する。筆者の定義に基づき「繋連」はプロジェクトの行為の結果として表現されたと言う感は免れない。しかし「装飾」の定義に添った「繋連」の染付けは、作者の確信に基づいて加飾され、真摯な行為が現れており、素直な優れた作品と評価する。